
テイルズオブザワールド レディアントマイソロジー 3 ~龍は閃光のように・・・~

颯

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テイルズオブザワールド レティアントマイソロジー3 ～龍は

閃光のように・・・

【Zコード】

Z9968Z

【作者名】

颯

【あらすじ】

世界中の守り手、「ディセンダー」、太古より予言されていたそれは、世界を守護するために現れる・・・

「世界樹」とその「世界樹が生み出したとされる星晶」というエネルギー鉱物で発展を続ける世界、ルミナシアしかし、星晶の力で産業が発展する国々がある一方で、それらの国から植民地化を強要されたり、恵みを奪われる国もありました・・・

空を駆ける船、バンエルティア号を拠点に活動するギルド「アドリビーム」の面々は、そういうた恵みを奪われる人々を助けるために活動をしています。

ある日、アドリビームに所属する少女カノンノは、空から落ちてきた主人公カイトと、光の中から現れたシユウ・・・彼等には自分の名前以外の記憶がなく、目的もわかりません。行く当てのないかれらはカノンノに連れられ、アドリビームに入ります。

新たなレディアントマイソロジーをお楽しみください。

プロローグ 始まり

？？？

『ゴオオオオアワアアアアアツ！－！』

4本の足に翼を生やした赤い竜の咆哮が・・・この場所に響き渡つた・・・・・

たくましかつた翼はボロボロでもう空も飛べない・・・・・角は半ばこりから折れ、前両足と右後ろ足は爪が折れ、尻尾は切断されていて、もう戦えるような状態ではない・・・・

？？？

「こんなものか・・・・・太古の世界・・・・・ルミナシアーの力をもつたドラゴンといつてもこの程度・・・・・」

その竜をこのような姿まで追い込んだ・・・・いや、まるで玩具の様に遊んだ人・・・・・いや人ではない。体には水晶のようなものをたくさんつけ、髪の色は白く毛先だけが青い・・・左目は大きな目で覆い尽くされ、右頭部には螺旋状に渦巻く目がついている。

？？？

「どどめだ・・・・世界創造のメルト！－！』

彼を中心に花のような魔方陣のようなものが展開され炎、氷、雷等の連続の攻撃が竜を襲つた・・・・

『ガアアアアアアアアアアアアアアツ！－！』

竜は攻撃をたてつづけに受け、吹きとんだ。

そして壁であの部分に呑みつけられ、その壁が破壊した……
どうやらこの場所は高いところにあるようだ……ピクリとも動かず海面へと落下していった。

？？？

「……仕留め損ねたか……まあいいだらう、この高さだ……
……海面にたたきつけられて死ぬだらう。」
やつして彼は闇へと消えていった……

プロローグ 落下

三人称 side

カノンノ

「今日は世界樹がよく見えるね・・・」

ピンクの髪のかわいらしい少女がたずねる。

ロックス

「ええ。何かいいことがあるかもしれませんね。」

空を2枚の羽を器用に使って飛んでいる小さな生物が答えた。

カノンノ

「うん。」

ロックス

「ん？ あれは・・・」

カノンノ

「どうしたの？ ロックス」

ロックス

「いえ・・・あれはいつたい・・・」

ロックスが見ていたほうにカノンノは向くそのには・・・

？？？

「うわあああああああ

カノンノ

「ん？ つてあれ人？」

ロックス

「こっちに落ちてきていますーー！」

カノンノ

「キヤアアアアーー！」

『ドスン・・・』

仰向けになつて落ちてきたのは少年だつた・・・まずははじめに目に入ったのは髪色・・・まるですべてを燃やすような・・・でもどこかに冷たさを覚える蒼い髪・・・服は黒いジーパンに白のシャツ、そのうえに赤と黒のチャックの服を羽織つて、そのうえに黒のフード付のロングコートを着ていた・・・そして背中には見たこともないような剣が提げられていた。

カノンノ

「・・・口、ロックス。急いで医務室に連れて行くよ。」

ロックス

「か、かしこまりました。」

数時間後

?

「カノンノ
キヤア！」

?

ア
二
一

「あ、ようやく目が覚めたのね。ここは医務室ですよ・・・展望台で倒れていたあなたを見つけてこいで治療していたの。」

「あ、ありがとうございます。」

ア
二
一

「お礼なら今あなたの奇声に驚いたこの子に言つてちょうだい。倒れていたあなたをここまで運んでくれたの。」

?

「え？ あ、ごめん。君が俺を？」

カノンノ

「うん。私の名前はカノンノ。カノンノ・グラスバレーよ。あなたは？」

カイト

「俺はカイト、カイト・バナージ。さつきはありがとうな。」

カノンノ

「ううん。気にしないで。」

そんな会話をしているとアニーが、

アニー

「あなた、すごい怪我をしていたのよ？しかも空から落ちてくる
し・・・」

カイト

「空から？怪我・・・って本当だ。」

突然青い髪の女人人が入ってきた。

アンジュ

「あら？目が覚めたのね？私はアンジュ、この船のリーダーをして
いるわ。」

ロックス

「僕はこの船でロンシヨルジュで、ロックスプリンゲスと申します。
ロックスとお呼び下さい」

アニー

「あら。申し後れました。私は医務室でお手伝いさせていただい
ています、アニー・バースと申します。」

カイト

「俺はカイト・バナージだ。」

アンジュ

「どうひであなた何者？空から落ちてきたつてのも気になるし…」

カイト

「え？俺は…あれ、俺は…」

アンジュ

「…？」

カノンノ

「もしかして記憶が…」

カイト

「ああ…みたいだ…何も思い出せない。」

アンジュ

「そう。なら仕方ないわね。記憶の無い状態でどこかの街に出したら、それこそ危険ですもの」

アンジュは少し考える仕草を見せると何か思い付いたようにカイトへと向いた。

アンジュ

「…そうね。なら、記憶が戻るまでのギルドで働かない？」
働いてさえくれれば、ちゃんと衣食住ついた待遇をするわよ

カイト

「ギルド？」

アンジュの言葉にここにいた全員が驚く。

アンジュ

「ええ。いろいろなギルドがあるけど、ここにいるギルドは、人を助けるのを目的としたギルドよ。」

カイト

「俺が……人を……助ける……」

アンジュ

「そう。」

カイトが下を向いて考えているとカノンノが元気そうにカイトに迫ってきた。

カノンノ

「そうだよ。一緒に働くかい？まあここに入るために入団テストみたいのもあるけど、私も手伝うからさ。」

カイト

「カノンノさん……うん、わかった……アンジュさん。いますぐに試験をお願いします。」

アンジュ

「だめ。」

カイト

「うり？」

アンジュ

「あなたそんな体で試験受ける気？試験は後口よ。今日はゆっくりねむりなさい。」

カイト

「あ、はい。」

アンジュ

「それじゃあみんな、戻るわよ。」

そういうながら、アンジュを先頭にカノンノ以外は医務室を後にした。

そしてカノンノは「…

カノンノ

「ねえカイト君。見て欲しい物があるんだけど。」

カイト

「見て欲しいもの？」

カノンノ

「うん。これ…」

カノンノはおそらく自分が書いたであろう絵をカイトに見せた。

カイト

「……これ……どこかで……見たことがある。」

カノンノ

「え？」

カイト

「カノンノさん。これをどこで？」

カノンノはあわてた表情で答える。

カノンノ

「え？えっと……それは、た、たまに頭のなかにみたこともないような光景が広がって、その見えた風景を筆でなぞつて、書いたのがこれらの絵なの……でもこれを見たことがあるって言う人はカイト君が初めて……」

そのカノンノの表情はどこかうれしそうなものがあった。

カイト

「どうした？」

カノンノ

「え？……他の人にも見せたけど、誰もこの風景を知らないの。それに、作り話でしょって、笑われちゃうの……」

カイト

「……作り話じゃねえよ。」

カノンノ

「え？」

カイト

「絶対にこの場所見つけて、カノンさんは嘘をつてないって証明してやるよ・・・それにこれは見たことがある気がする。だから心配するな・・・」

カノンノ

「あ、ありがとう。カイト君。」

カイト

「あ、あと、カイト君じゃなくてカイトって呼んでくれないか?」

カノンノ

「え? どうして?」

カイト

「ん~何でだろ・・・呼び捨てで呼ばれたいのかな・・・それとも記憶があつたころはカイトって呼ばれていたのかも。」

カノンノ

「・・・うん。わかった。その代わり私もカノンノって呼んで?」

カイト

「・・・わかった。あらためてようしく。カノンノ。」

カノンノ

「うん。こちらこそ。カイト。」

物語が始まる。

いまここに、龍の騎士と光の騎士とカノンノたちの

プロローグ 落下

三人称 side

カノンノ

「今日は世界樹がよく見えるね・・・」

ピンクの髪のかわいらしい少女がたずねる。

ロックス

「ええ。何かいいことがあるかもしれませんね。」

空を2枚の羽を器用に使って飛んでいる小さな生物が答えた。

カノンノ

「うん。」

ロックス

「ん？ あれは・・・」

カノンノ

「どうしたの？ ロックス」

ロックス

「いえ・・・あれはいつたい・・・」

ロックスが見ていたほうにカノンノは向くそのには・・・

？？？

「うわあああああああ

カノンノ

「ん？ つてあれ人？」

ロックス

「こっちに落ちてきていますーー！」

カノンノ

「キヤアアアアーー！」

『ドスン・・・』

仰向けになつて落ちてきたのは少年だつた・・・まずははじめに目に入ったのは髪色・・・まるですべてを燃やすような・・・でもどこかに冷たさを覚える蒼い髪・・・服は黒いジーパンに白のシャツ、そのうえに赤と黒のチャックの服を羽織つて、そのうえに黒のフード付のロングコートを着ていた・・・そして背中には見たこともないような剣が提げられていた。

カノンノ

「・・・口、ロックス。急いで医務室に連れて行くよ。」

ロックス

「か、かしこまりました。」

數時間後

?

「カノンノ
「キャア！」

? ? ?

ア
二
一

「あ、ようやく目が覚めたのね。ここは医務室ですよ・・・展望台で倒れていたあなたを見つけてここで治療していたの。」

「あ、あつがとく。

ア
一
一

「お礼なら今あなたの奇声に驚いたこの子に言ひてちょうだい。倒れていたあなたをここまで運んでくれたの。」

?

「え？ あ、ごめん。君が俺を？」

カノンノ

「うん。私の名前はカノンノ。カノンノ・グラスバレーよ。あなたは？」

カイト

「俺はカイト、カイト・バナージ。さつきはありがとうな。」

カノンノ

「ううん。気にしないで。」

そんな会話をしているとアニーが、

アニー

「あなた、すごい怪我をしていたのよ？しかも空から落ちてくる
し・・・」

カイト

「空から？怪我・・・って本当だ。」

突然青い髪の女人人が入ってきた。

アンジュ

「あら？目が覚めたのね？私はアンジュ、この船のリーダーをして
いるわ。」

ロックス

「僕はこの船でロンシヨルジュで、ロックスプリンゲスと申します。
ロックスとお呼び下さい」

アニー

「あら。申し後れました。私は医務室でお手伝いさせていただい
ています、アニー・バースと申します。」

カイト

「俺はカイト・バナージだ。」

アンジュ

「どこからあなた何者？空から落ちてきたつてのも気になるし…」

カイト

「え？俺は…あれ、俺は…」

アンジュ

「…？」

カノンノ

「もしかして記憶が…」

カイト

「ああ…みたいだ…何も思い出せない。」

アンジュ

「そう。なら仕方ないわね。記憶の無い状態でどこかの街に出したら、それこそ危険ですもの」

アンジュは少し考える仕草を見せると何か思い付いたようにカイトへと向いた。

アンジュ

「…そうね。なら、記憶が戻るまでのギルドで働かない？」

働いてさえくれれば、ちゃんと衣食住ついた待遇をするわよ

カイト

「ギルド？」

アンジュの言葉にここにいた全員が驚く。

アンジュ

「ええ。いろいろなギルドがあるけど、ここにいるギルドは、人を助けるのを目的としたギルドよ。」

カイト

「俺が……人を……助ける……」

アンジュ

「そう。」

カイトが下を向いて考えているとカノンノが元気そうにカイトに迫ってきた。

カノンノ

「そうだよ。一緒に働くかい？まあここに入るために入団テストみたいのもあるけど、私も手伝うからさ。」

カイト

「カノンノさん……うん、わかった……アンジュさん。いますぐに試験をお願いします。」

アンジュ

「だめ。」

カイト

「うり？」

アンジュ

「あなたそんな体で試験受ける気？試験は後口よ。今日はゆっくりねむりなさい。」

カイト

「あ、はい。」

アンジュ

「それじゃあみんな、戻るわよ。」

そういうながら、アンジュを先頭にカノンノ以外は医務室を後にした。

そしてカノンノはといふと・・・

カノンノ

「ねえカイト君。見て欲しい物があるんだけど。」

カイト

「見て欲しいもの？」

カノンノ

「うん。これ・・・」

カノンノはおそらく自分が書いたであろう絵をカイトに見せてきた。

カイト

「これ……どこかで……見たことがある。」

カノンノ

「え？」

カイト

「カノンノさん。これをどこで？」

カノンノはあわてた表情で答える。

カノンノ

「え？えっと……それは、た、たまに頭のなかにみたこともないような光景が広がって、その見えた風景を筆でなぞって、書いたのがこれらの絵なの……でもこれを見たことがあるって言う人はカイト君が初めて……」

そのカノンノの表情はどこかうれしそうなものがあつた。

カイト

「どうした？」

カノンノ

「え？……他の人にも見せたけど、誰もこの風景を知らないの。それに、作り話でしょって、笑われちゃうの……」

カイト

「……作り話じゃねえよ。」

カノンノ

「え？」

カイト

「絶対にここにこの場所見つけて、カノンノさんは嘘を言つてないって証明してやるよ……それにこれは見たことがある気がする。だから心配するな……」

カノンノ

「あ、ありがとう。カイト君。」

カイト

「あ、あと、カイト君じゃなくてカイトって呼んでくれないか?」

カノンノ

「え? どうして?」

カイト

「ん~何でだろ……呼び捨てで呼ばれないのかな……それとも記憶があつたころはカイトって呼ばれていたのかも。」

カノンノ

「……うん。わかつた。あらためてようしく。カノンノ。」

カイト

「……わかつた。あらためてようしく。カノンノ。」

カノンノ

「うん。いらっしゃいそ。カイト。」

いまここに、龍の騎士と光の騎士とカノンたちの物語が始まる。

第2話・絵

三人称 side

カイト

「魔神剣・双牙！！」

カノンノ

「グレイブ！！」

エミル

「穿孔破！！」

マルタ

「フォトン！！」

ここはコンフェイト大森林・・・チチプリ10体の討伐依頼を受け、ここにきた訳だ・・・ちなみに今10匹目を倒したところだ。

マルタ

「それでも2人は息がぴったりだよね～」

エミル

「うん。こんなに息が合つなんてす”いよ。」

カイトがアドリビトムに入つてすでに半月がたつた。いまではようくこの4人でクエストに行く機会が多い・・・なかでも、カイトと

カノンノのコンビは流れるような連携をとるほどだ。もちろん、Hミルとマルタのコンビもすごい連携だ。だからこの4人でチームを組んでいるというわけだ。

カイト

「何行ってんだよ。2人の恋の連携にはかなわないよ。」

カノンノ

「本当。お似合いだよね。」

マルタ

「でしょー。やっぱり私はHミルと・・・／＼／＼

Hミル

「ちよつとマルタ！？何いつてんのさーーあ～もへ、早く帰ろわ。

」

マルタ

「あ～ちよつと～Hミル～～

追いかけていくマルタを見てカイトとカノンノは微笑んだ。

アドリビトム 展望台

カイト

「ん」・・・・・

カノンノ

「どう? カイト。」

カイトは今カノンノが書いた絵を見ている。

カイト

「・・・やつぱりどこかで見たことはあるんだけど・・・それが
どこがまではわからないなあー」

カノンノ

「そう。」

カイト

「ごめんな。力になれなくて。」

カノンノ

「ううん。それはこっちのセリフだよ。」

カイト

「え?」

カノンノ

「私の絵で、カイトの記憶が戻つたらって思つてたの・・・だか
ら・・・」

カイト

「・・・ありがとう。カノンノ。」

カノンノ

「どういたしまして。」

そんな2人に水を差すかのようにあの2人がやつてきた。

エミル

「カイト！…ひと勝負やるぜえ！…」

カイト

「エミル！…つかなんでラタトスクモードなんだよ！…」

マルタ

「エミル～がんばって～」

カノンノ

「ねえマルタ…・何があつたの？」

マルタ

「え？エミルが水と間違えて酒を飲んだところに、カイトって強
いよね～って言つたら、『俺がカイトをぶつづす！…』ってなつ
たんだけどいまいちよく分かんなくて。」

カイト&カノンノ

「（絶対それが原因で普段のエミルが落ちたんだ）」

カイト

「つちじょうがねえ！…やるしかねえか。」

エミル

「行くぜ！ カイト！」

カイト

「きやがれ！ エミル！」

2人はほぼ同時に駆け抜けた、しかし技は使わずに単純な剣術と体術で勝負している。お互い一歩も引かない。先に動いたのはエミルだ。

エミル

「崩蹴脚！ ！」

カイト

「つち。烈破掌！ ！」

空中に飛んで蹴りを繰り出したエミルに、カイトは剣を持っていない左手でエミルの足に合わせるように突いた。

エミル

「瞬連刃！ 雷神烈光刹！ ！」

素早い3連撃から斬り下ろし、連撃で相手を攻撃し斬撃と共に素早く相手の背中に回り込んだ。

だがカイトはこれを剣で受け流すようにすべて耐えた。

カイト

「次は俺の番だ！！魔神剣！！魔神剣・双牙！！魔神連刃斬！！！」

カイトは計7発の衝撃波を打ち込んだ。それをすべてかわしたエミルだが、

カイト
「イオラー！」

エミルを中心に小さな爆発が数多く起こった。

これをエミルは前転でやり過ごす。

エミル
「魔神剣！！」

カイト

「魔神剣！！」

お互に放つた衝撃波が交わり、相殺する・・・時間にして1秒にも満たない間にエミルはカイトへと迫った。

エミル

「鳳翼旋！！秋沙雨！！虎咬裂斬刺！！」

カイト

「何！？グアアー！」

前方に跳躍しつつ2度斬り上げ、連続で突き、切り上げながら自分も跳躍する。そして回転斬りで上昇しながら最後に衝撃波を放つた。

カイトはまるか向こうへと吹き飛ばされた。

Hミル

「獸招来！！」

マルタ

「ちよつとHミル……勝負はついたじゃない！！」

Hミル

「何いつてやがる・・・まだ勝負はついてねえぞ。」

マルタ

「え？」

見るとそこには多少傷がついているものの、まだピンピンしているカイトが立っていた。

カノンノ

「カイト！？」

カイト

「いつて、な。まさか相殺した後すぐここくるとは思ってなかつた

ぜー！」

Hミル

「フン。まだ行くぜ……魔王地顎陣！！」

カイト

「甘え……蒼龍滅牙斬！！」

Hミル

「なに！？これを相殺しただと！？」

カイト

「どこ見てんだよ。」

エミル

「！！」

カイトはエミルの懷に入った。そこで流れるよな連続コンボを叩き込んだ。

カイト

「瞬辻剣！－雷神剣！－風雷神剣！－爪竜連牙斬！－」

疾風のように突き、さらに突き雷を落とす、前の2つの複合技を繰り出し、さらに剣と拳や足を交互に使って切り、叩きつけていく。そして最後に巨大な真空波で切り刻んだ。

カイト

「幻魔衝裂破！－」

先ほどカイトが吹き飛んだように、エミルもとんだ。

だがエミルはすぐに立ち上がった。

エミル

「俺は負けるわけにはいかない！－ウオオオオオ！－」

瞬間エミルの周りに様々の色の光の円が現れる。オーバーリミッ
ツだ。

カイト

「上等！！かかるべきやがれ！！」

エミル

「空牙衝！！雷神烈光刹！！」

跳躍して斜め下に針の様な衝撃波を何本も同時に放ち、連撃で相手を攻撃し斬撃と共にカイトの背中に回りこんだ。すべてを受け流したカイトだが

カイト

「（まことに。喰らうつ…）」

獣招来でスピードが上がったエミルにはここまでが限界だった。

エミル

「魔王獄炎波！！この一撃で…沈め！！」

カイト

「グアアアアアアアアアアアア…！」

カイトは滅多切りにされ後ろの回りこまれ湧き上の炎に飲まれた。

カイト

「はあ…はあ…はあ…はあ…」

エミル

「はあ…はあ…はあ…はあ…」

カイト

「これで決めてやる！－煌け！－龍の力よ！－」

カイトもオーバーリミッツで対抗する。その時、彼の右手の甲に竜の顔のような紋章が浮かび上がった

カイト

「これが俺の秘奥義の一つだ！－ライデイン！－」

カイトの剣に雷が降り注いだそしてその帶電している刀を鞘に収めた。

ヒミル

「なにをしてこる？」

カイト

「それはお楽しみってことで・・・お互にこれで最後にしようぜ。」

」

ヒミル

「ああ。」

ヒミルは剣を裏手にもち、静かに腰を落とした。そして闇のオーラを剣に収束させていく。

カイト

「（4・・・3・・・2・・・1・・・）－－！」

勢いよく剣を抜いた、その剣は雷の力がよりいつそつまつっていた。そして剣を裏手に持ち替え、気を高めていく。

エミル

「これで終わりだ！！！アイン・ソフ・アウル！！」

カイト

「集え雷の力！！限界突破の矛となれ！！ギガストラッシュユー！」

光と雷の衝撃波がぶつかった、威力は互角。次の瞬間、大きな爆発と共に2つの衝撃波が弾けとんだ。

マルタ

「・・・引き分けだね。」

カノンノ

「・・・うん。」

船の両端には爆発で吹き飛ばされた2人がいた。

カイト

「う・・・っく。」

エミル

「う・・・ん・・・あれ？ここは。」

マルタ

「エミール～？」

エミル

「え？どうしたの？マルタ。そんな怖い顔して・・・」

マルタ

「君のせいで大変だつたんだからねーー！」

ユミル

「え？え？？」

カイト

「ちよ・・・マルタ、落ち着け。ユミルも悪気があつたわけじゃ
ねえし。」

マルタ

「フォトンーーー！」

カイト

「つぐ。」

マルタ

「ああはやくきなさい。ちよつと話があるの。」

ユミル

「ちよ？マルタ。やめ、うわああああ・・・・・・

カイト&カノンノ

「・・・・・・・・・・」

しかし・・・カイトの紋章は勝負が終わつたときには消えていた。

紋章が浮かびあがつていたことはカイトを含め、だれもわからない・

・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9968z/>

テイルズオブザワールド レディアントマイソロジー3 ~龍は閃光のように~

2011年12月31日20時48分発行